UCLA歯学部ワイントローブセンターおよび補綴学講座教授／骨・インプラントサイエンス研究チーム（LBIS）ディレクター

小川 隆広さん

おがわ・たかひろ ●1965年長崎県生まれ。90年九州大学[illegible]士課程卒業後、同歯学部補綴学第二講座助手を経て98年[illegible]渡米。2002年UCLA歯学部助教授、04年米国カリフォル[illegible]取得、05年UCLA歯学部准教授（終身教授位）を経て11年[illegible]チタン機能化における世界的権威。同研究成果とそれに基づ[illegible]術は臨床応用が開始された。多数の学術研究賞を受賞し、10[illegible]る賞の一つ、William J.Gies賞受賞。日本では、口腔先端応用[illegible]

紫外線照射で接着力回復

【ワシントン17日共同】歯科のインプラント治療で使われる人工歯根などのチタン材料は製造後、骨細胞との接着力が半分以下へと急速に劣化するものの、紫外線の照射で回復することを、米カリフォルニア大ロサンゼルス校歯学部の小川隆広准教授（修復・インプラント学）らのチームが十七日までに発見した。研究の一部を近く英国の専門誌に発表する。

劣化後の接着力を二―三倍に高める技術を、日本で年内に実用化させるための準備を進めて

人工歯根のチタン材

歯科のインプラント治療で使うチタン製人工歯根

インプラント治療 接着力2―3倍向上

【ワシントン17日共同】歯科のインプラント治療で使われる人工歯根などのチタン材料は製造後、骨細胞との接着力が半分以下へと急速に劣化するものの、紫外線の照射で回復することを、米カリフォルニア大ロサンゼルス校歯学部の小川隆広准教授（修復・インプラント学）らのチームが十七日までに発見した。研究の一部を近く英国の専門誌に発表する。

劣化後の接着力を二―三倍に高める技術を、日本で年内に実用化させるための準備を進めている。世界で年間数百万人が利用しているとされるインプラントなどの治療効果向上に役立つと期待される。

失った歯を再建するインプラント治療では、ねじのようなチタン製の歯根を手術であごの骨に埋め込み、骨の細胞が歯根を覆って固定される四、五カ月後に、人工の歯をかぶせて完成させる。

チームによると、チタン材料は製造直後から空気中の炭素が表面に付着し、細胞との接着力が一カ月後に約半分に、実際に使われることの多い数カ月後には約三分の一に、それぞれ低下することが分かった。使用

劣化のチタン、紫外線照射で回復

Takahiro Ogawa, UCLA LBIS